

## Paul Klee の “pädagogisches Skizzenbuch” について

石 野 真

Makoto ISHINO : On Paul Klee's “Pädagogisches Skizzenbuch”

ABSTRACT : This paper is a part of study on “Pädagogisches Skizzenbuch”. Paul Klee's work “Pädagogisches Skizzenbuch” was written in 1924, and published as the first volume of “Bauhaus Books” in 1925. It was his own textbook for art education at the Bauhaus.

Klee portrayed simply and purely, like a child, whatever came into his mind, drawing in obedience to his feelings and coloring according to his mood. He expressed the mystical world of his own inner life.

For Klee, teaching and his own creative work were inseparably linked together, and his “Pädagogisches Skizzenbuch” based on his teaching experience at the Bauhaus, well illustrates the unity of his creative and educational activities. In this book we find the secret of his creative life, it is a major influence on his work.

The basic element of Klee's formative art is line, and it can be said that his work is the art of line. Simply speaking, klee's “pädagogisches Skizzenbuch” too may be called the study of line

### は じ め に

パウル・クレー (Paul Klee, 1879~1940) の著書, “Pädagogisches Skizzenbuch” は1924年に執筆され, 翌1925年に「バウハウス双書 (Bauhaus bücher)」全14巻の第1巻として発行された。60余ページのこの小冊子は1920年秋, クレーがワイマール国立バウハウスに招請されて以来のバウハウスにおける教授経験をもとにした教育ノートと友人でありバウハウスでの同僚モホリ・ナギー<sup>1)</sup>の序文と後記からなっている。

10年前, 勝見勝氏の翻訳により<sup>2)</sup> “Pädagogisches Skizzenbuch” を読んで以来, なんとか原文を読みたいとさがしもとめ, 英訳版が手に入り, 最近, 復刻版ともいえる “Neue Bauhaus bücher” の一冊が揃い<sup>3)</sup>, その他の資料とともに今度, 研究にとりかかることが出来た。

60余ページの小冊子ながら, “Pädagogisches Skizzenbuch” の内容は実に深く, 広く, とくにクレーがバウハウスの他の教授陣とともに, 新しい時代の新しい美術, 芸術を開拓しようとする意気込みがうかがわれ, またかつての美術の教育が石膏デッサンのみにたよっていたというたよりなきを反省して, 新しい時代の新しい美術教育を築こうと熱心にとりくんだ成

果が遺憾なく発揮されている。そしてクレーの作品に見られる、構成、色彩、音楽性、彼自身の内面生活の神秘的で魔術的世界の表現、純粹さ、抽象性の秘密、とくにクレーの芸術が線の芸術といわれているように、線についての考察の深さがあますところなく盛り込まれている。

ここで、“Padagogisches Skizzenbuch” のすべてを考察することはとても不可能と思われる。ここでは“Padagogisches Skizzenbuch” の第 I 章 1 節より 5 節までをひと区切りとして考察し、とくに、“Padagogisches Skizzenbuch” を中心として、クレーの全作品の造形活動の秘密をさぐるという研究は今後の課題としたい。

## I パウル・クレー

近代絵画に独自の世界を開拓したクレーは、油絵画家であり、水彩画家であり、素描家であり、版画家であり、さらにすぐれた美術教師であった。1879年ベルン市の近くにドイツ人の音楽教師を父に、音楽家であるスイス婦人との間に生れた。少年時代はベルンで送ったが、後に主としてドイツで修業し活躍した。1933年、クレーはスイスに戻り、1940年に亡くなったが、今日、クレーの作品の重要なものは、そのほとんどがスイスに、殊にベルンとバーゼルにある。

「晩には父が愛器テストーレのヴァイオリンを、母がピアノを弾いて素晴らしい演奏の時をすごしました。」<sup>5)</sup> フェリックス・クレー

「父と母は毎晩のように、数時間、バッハ、ヘンデル、モーツァルト、ベートーヴェン、ブラームス、レーガのヴァイオリン・ソナタを弾いていました。この演奏は二人だけのときは試演でしたが、客が訪れたときには、完全な演奏会でした。」 フェリックス・クレー

クレーみずから「ぼくは音楽的な環境ではぐくまれた」と語っているように、パウル・クレーの生家はたえず音楽で満ちあふれていた。そして彼自身の家庭も、息子フェリックス・クレーがのべているように音楽的であった。クレーについて、またクレーの作品について考えるとき、その造形的な要素と音楽的な要素との密接な関連が問題となる。11才にしてすでにベルリン市立管弦楽団の第二ヴァイオリンの補欠奏者にえらばれ、のちにコンサート・マスターをつとめたクレーにとっては、音楽は決して「ヴィオロン・ダンゲル」つまり「画家アングルのヴァイオリン」ではなかった。クレー自身、芸術で身をたてるについて、画家か音楽家かの決定にはかなり迷ったようだ。そして画家として歩みはじめてからも、音楽への愛着、愛好は終生かわらなかった。

リズムカルな画面構成、デリケートな線の流れをみても、クレーにとって音楽と美術は一つであり、不可欠のものであった。クレーは、音楽の音の高低、強弱の変化、ハーモニーの微妙な変化、時間的な変化といったあらゆる要素を視覚の世界で考え、造形思考することによって線や色彩の秘法をさぐるようとしているように思われる。ちょうど音楽に、楽典というやくそくごとのもとに和声学とか対位法があるように、クレーが、美術の世界にも、造形の諸要素を、

それぞれ独立した意味と価値をもって確立させること即ち美術の研究の中に造形文法というようなものを考えようとしたことまた造形の約束ごとをはっきり意識して制作にとりこんでいたことには、クレー自身の音楽的素養と音楽的環境が大きく影響していることを否定出来ない。

## II クレーとバウハウス

1919年春、ワルター・グロピウス (Walter Gropius, 1883~1969)<sup>7)</sup> はワイマールに招かれ、国立バウハウスを設立した。1924年、右傾化した政府の政治的、経済的圧迫からワイマール・バウハウスは閉鎖を決定、翌25年デッサウ市の招きを受けて移転、市立バウハウスとして再発足するも、バウハウスの教育理念と組織に対する圧迫は続き1932年市参事会は全教員との契約を解除、閉鎖を決定した。10月には、ミース・V. D. ローエはベルリンに私立バウハウスを再建したが、1933年4月10日、ベルリンの古工場に仮住まいしていたバウハウスを200人の警官がとりまき、32名の学生を拘引し、場内をくまなく差押えてしまった。バウハウスはドイツ第1共和国とともに始まり、ともに終りをつげたのである。

バウハウスは芸術と技術、人間と技術、芸術と人間の間に存在する問題を解決することによって、産業革命以後急速に発達した科学技術と芸術の統一を目標とした。従来の個人主義的サロンの傾向だけではなくて、機械による大量生産方式を積極的に取り入れた新しい芸術=デザインを確立した。バウハウスの目標は、美術の諸領域が個々に存在を主張するのではなくてあらゆる創造的芸術活動の総合、統一にあったといえる。そして新らしい時代の新しい美術は新しい美術教育より始まるとして、理論的教育と実際教育を一体化した造形教育を行った。

クレーがワイマールからの招聘状を受けたのは1920年10月であった。当時クレーはまだ彼の名前も作品も、彼を尊敬する友人たちの小さな範囲内で知られていたにすぎない。ワルター・グロピウスは招聘状に重ねて書翰を寄せ、次のごとく懇請している。「学生たちは、あなたにおいて願えるという希望に胸をふくらませています。ですから、つまりわれわれはこぞつて、心からあなたをお待ちしているわけです。どうぞ、折り返し快諾をお寄せ下さい。私はすでに1年前、バウハウス創立当初から、この招請をあなたに送る瞬間を待ちこがれていました。……」グロピウスが学生たちの熱望を伝えているのは決して誇張ではない。当時、クレーの作品はドイツのほとんどの美術学校で、禁断の木の実となっておりベルリンのアカデミーでは、校内でクレーの作品をもちまわる学生は懲戒処分につされたという。旧世代の教授はクレーの制作を遊戯に過ぎないとし、造形への意志に欠けていると見て排斥したのである。このような状況にあったにもかかわらずクレーの作品は次第にその信奉者を増していった。とくにバウハウスの招きを受諾することによって得られた生活の安定と社会的地位はクレー自身の制作と教育活動をますます充実させていった。バウハウスにおける広いアトリエの完成によって、以後約12年間クレーの制作と教育活動は、クレー自身にとって最もめぐまれた良い時代であったと

いえる。

「私は以前から、自分がいつかは良心にもとづいた、有効な教育活動に従事しなければならないと思ひ、その準備に心掛けていたことを明言します。貴君がいわれるように芸術家が教育にたずさわることは、その芸術に清新の気をもたらし、若い時代精神を啓発し具現していく上で、私にはとりわけ重要なことと思われま<sup>8)</sup>す。」

「ぼくがここに来たのは教えるためだ。とすれば、ぼくは、これまでほとんど無意識におこなってきた描画をぼく自身のために、明確にしてみなければなら<sup>9)</sup>ない。」

クレーの美術教育にかける情熱は学生に受け入れられると同時にクレー自身の内省として、たえずノートにまとめられていった。クレーにとって教えるということは、クレー自身の創作活動と密接に結びついていたのである。“Pädagogisches Skizzenbuch” はバウハウス・ワイマールおよびデッソウにおける教育活動と制作活動から生み出された教育ノートとして、実際には、バウハウス・ワイマールにおける理論教育の一部をなす原案として執筆され刊行された。

### III Pädagogisches Skizzenbuch

“Pädagogisches Skizzenbuch” の原文は四つの章にわかれ、全体で43節からなっている。原文の章および節にはタイトルはないが、英訳版の解説にシビル・モホリ・ナギーが一部にタ<sup>10)</sup>イトルを与えている。その他の章、節については小山清男氏の研究（\*印付記）によると、

#### I 比例的な線と構造

1. 曲線\*
2. 折線\*
3. 閉じた線の画的効果\*
4. アクティブな面とパッシブな線\*
5. 以上の要約
6. 構造
7. 分節
8. 自然における物質の構造
9. 動的意志と働的行動（超物質的）としての、運動の自然有機体
10. 筋と骨との関係\*
11. 脳のはたらき
12. 実例（3分法に基づく）
13. 加法的構成と減法的構成\*

#### II 次元とバランス

14. 次元
15. 二次元と三次元\*
19. 三次元の作図\*
17. 垂直性
18. 垂直性（つづき）
19. 水平性
20. 再び垂直性について
21. 綱渡り\*
22. 秤
23. 非対称のバランス
24. Fig23への図示
25. 塔を建てること

#### III 重力の曲線

26. 土、水、大気
27. 大気
28. 土
29. 水
30. 土（山）と大気との複合
31. 大気
32. 宇宙と大気との複合

#### IV 運動と色彩のエネルギー

33. 動いている形態の象徴, 回る独楽 34. ペンジュラム 35. 円 36. スパイラル  
 37. 矢 38. 矢の分析\* 39. 引力\* 40. 黒い矢の形成 41. 色彩の推移\*  
 42. 動きの組織 43. 無限の動き, 色彩。

以上43節はクレー自身の筆になるスケッチとノートでその造形思考については限りない興味をおぼえちよど謎をとくような楽しさとともに、クレーの造形の秘密をさぐる事が出来そうという期待とで、内容はいとも簡単のように思えながら、実際にクレーの作品の数々をながめてみると、クレーがいかに深い洞察をもって思索し、クレー自身の作品をふりかえりながら、学生に語りかけていったということがよく理解出来る。

本稿では、クレーの全作品、約5000点のすべてに研究の目をそそぐことはとても不可能であるが、ここ数年来、注意して見て来た作品および、1969年のクレー展<sup>11)</sup>、クレー作品集を参考として、“Pädagogisches Skizzenbuch” 第1章1節より第5節までについて原文を考察する。

### 第I章 第I節 曲線

「気ままに動きまわり、あてどなく散歩自体をたのしむ、アクティブな線。この線は、点の動きによってつくられる (第1図)」「同じく、装飾をつけた線。(第2, 3図)」「同じく低徊する線。(第4図)」、<sup>12)</sup>「かくれた主線を囲繞してはしる傍線二つ。(第5図)」

幾何学では、「点が移動して線を形成する、線は点の動いた軌跡なり」としているが、クレーもまづ点の動きによって出来る線の考察からはじめている。点の動きが常に一定であれば直線

**Eine aktive Linie, die sich frei ergeht, ein Spaziergang um seiner selbst willen, ohne Ziel. Das agens ist ein Punkt, der sich verschiebt (Fig. 1):**



Fig. 1

**Dieselbe Linie mit Begleitungsformen (Fig. 2 und 3):**



Fig. 2

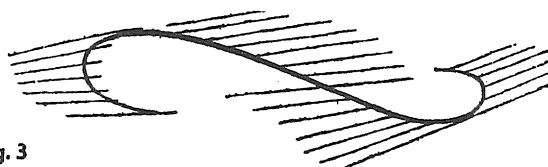


Fig. 3

**Dieselbe Linie, sich umschreibend (Fig. 4):**

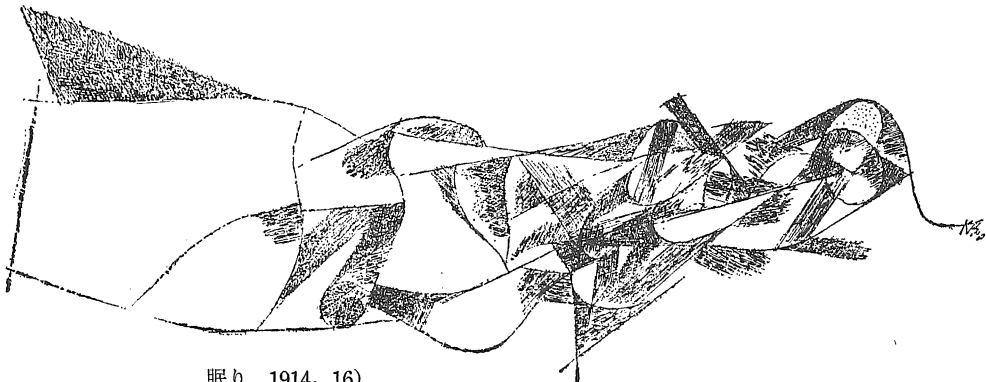
Fig. 4

**Zwei Nebenlinien, die Hauptlinie imaginär (Fig. 5):**

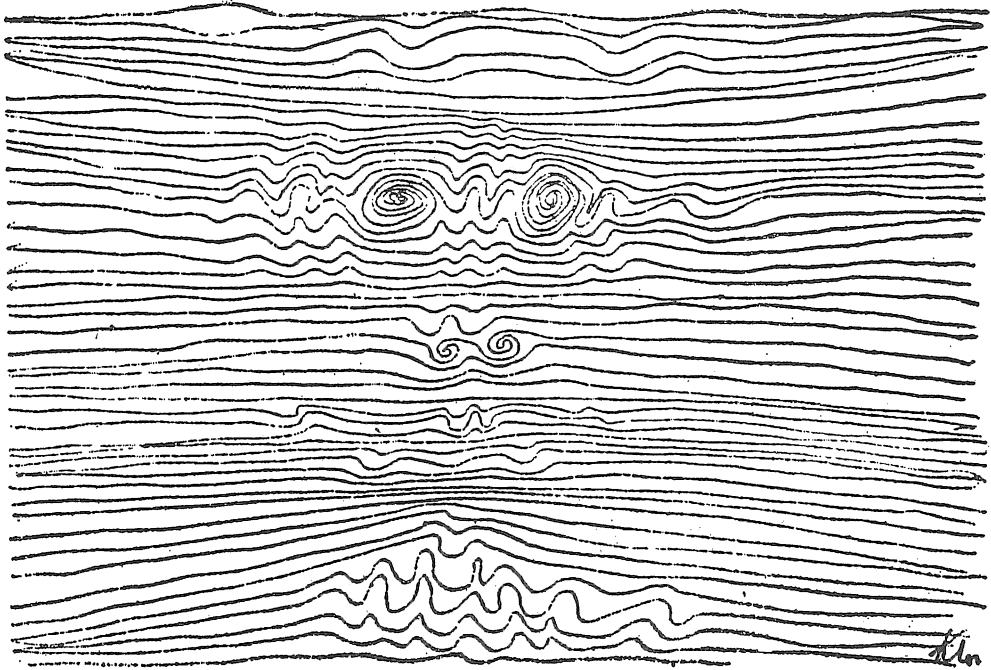
Fig. 5

となり、点の動きが方向性をかえてゆくとき線は曲線となる。クレーは、まづ流動的な曲線からこのノートをはじめている。クレーにとって線はまづ動的に把握されねばならなかったのである。自由気ままに歩むアクティヴな線は、作品、「水上のたわむれ、1935」にもあらわれている。点が動いて線となるには時間が必要である。線が面となる際にも同様である。クレーにとって点はまづ動きを開始せねばならないものであった。点は静的なものとしてとらえられながらも、動こうとしているからであろう。

クレーの芸術は線の芸術ともいえる。そしてこの “Pädagogisches Skizzenbuch” も線についての研究といって良いであろう。クレーは日記の中で「私は線だけで描く、物質のくびきからときはなれた純粋な精神の表象である線を用いて描く。よけいな分析的なものは切り捨て、大担直截に本質そのものに迫る。」と述べている。事実、線描による作品は実に多い。ど



眠り 1914. 16)



水上のたわむれ 1935, 14)

の作品の中にもクレーの線が、クレーの内面的世界を語りかけている。クレーにとって、目にみえる自然の再現からの離脱は、クレー自身の心のうちにあふれるものの表現方法として必然的であったのである。Fig. 3「装飾をつけた線」は主なる線の動きに影響をあたえる線を表現している。Fig. 2 と Fig. 3 とでは主線の動きはまったく同じでありながら、それぞれの感じはまったくといってよいほどかわってしまっている。下の作品、「眠り」にはその表現方法がよく使いこなされている。気ままな曲線が直線にからみつき直線と曲線にやどる影が睡魔をあらわしているのだろうか。「眠り」というテーマをよく表現しているし、クレーの線描作品の代表といえるだろう。クレーは「美術は、見えているものを再現するのではなくて、見えていないものを表現する<sup>15)</sup>」といている。美術が心の表現であり、作者の内なる世界をほんとうに表現するためには自然をモチーフとするだけでは足りないのであろう。むしろ、色と形による新しいことばで語りかける方がずっと早いのかも知れない。

## 2 節 折 線

「定点間を過ぎる動きに限られたアクティブな線。(第6図)」

線分の両端にある点はあまり意識されないがひとたび方向をかえてあゆみはじめるとその角にはっきりと点が意識される。そして線の方向性が強まり、動きがよりいっそう強く感じられてくる。

## 3 節 閉じた線の面的効果

**Eine aktive Linie, die, befristet, sich zwischen bestimmten Punkten bewegt (Fig. 6):**

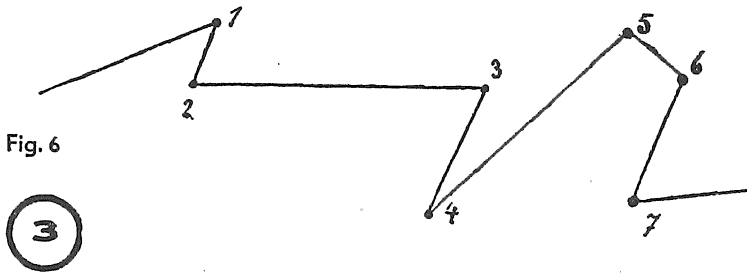


Fig. 6



**Eine mediale Linie, welche zwischen Punktbeziehung und Flächenwirkung steht (Fig. 7):**

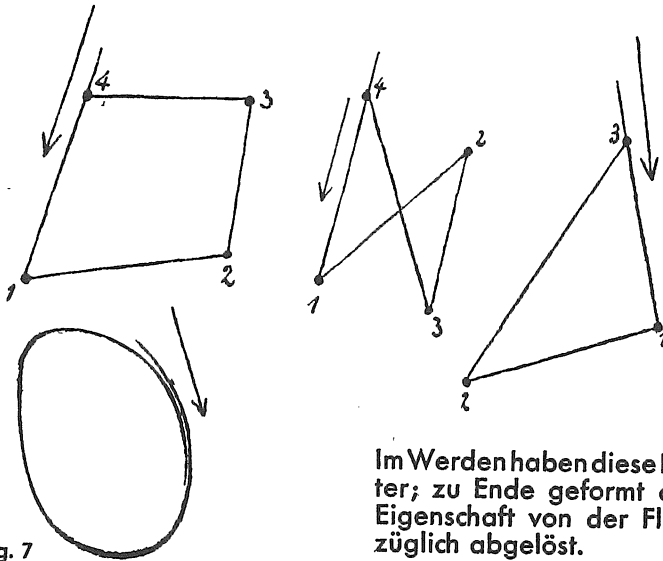


Fig. 7

**Im Werden haben diese Figuren linearen Charakter; zu Ende geformt aber wird diese lineare Eigenschaft von der Flächenvorstellung unverzüglich abgelöst.**

「点の動きと、面の形成とを兼ねる仲介的な線。(第7図)、これらの形は形成途上では、線の性格を備えているが、ひとたび完成すると、面の姿にかわってしまう。」

Fig. 1～Fig. 6 までの線はすべてアクティブな線 (aktive Linie) として考察されている。アクティブな線とはその線が主体的であること、即ち線の存在は常に面の存在を暗示する。Fig. 1 の場合でも左より右へ巻きこみ、巻きあげる一本の曲線は、その一本の線によって上部空間と下部空間を仕切っている。しかしわたしたちの目はまったくといってよいほど線にそそがれ、その線の動きを追い、流れるような曲線に柔和で、やさしく、リズムカルな動きを感じとっている。アクティブな線がメディアルな線にかわってゆくのが Fig. 7 である。直線が折れまがったり、交差したり、曲線が閉じるとき、いままで線として活動していた一本の線は面を暗示させる。活発に動いていた線とちがって面は静かである。そこには線という感じはまったくなく面そのものである。Fig. 7 の場合、線によって出来る面は、面でありながらもまた面というより形として考えられる。即ち線によって出来る形である。



## 4 節 アクティブな面とパッシブな線

「面をつくること（線の動き）から生じるパッシブな線。（第8図），パッシブな四角の輪郭線と，パッシブな円周の線。ともに，アクティブな面形成から派生したもの。」

Fig. 7 においては，アクティブな線によって出来る面の場合，面を形成する線はメディアルな線となるが，出来る面はパッシブな存在である。Fig. 8 の場合はその反対で，アクティブな線の動きによって生じる面はパッシブであり，パッシブな面にある線——輪郭線はパッシブであって，面形成も Fig. 7 の場合はパッシブな面であり，Fig. 8 の場合はアクティブな面である。

点，線，面についてアクティブに考えれば，点は位置だけあって大きさのないもの，線は点の移動した軌跡，面は線の移動した軌跡であり，これらをパッシブに考えれば，点は線の限界又は交差に見い出され，線は面の限界または交差に見い出され，面は立体の限界または境界に見

**Passive Linien, die aus einem Flächenactivum (fortschreitende Linie) resultieren (Fig. 8):**

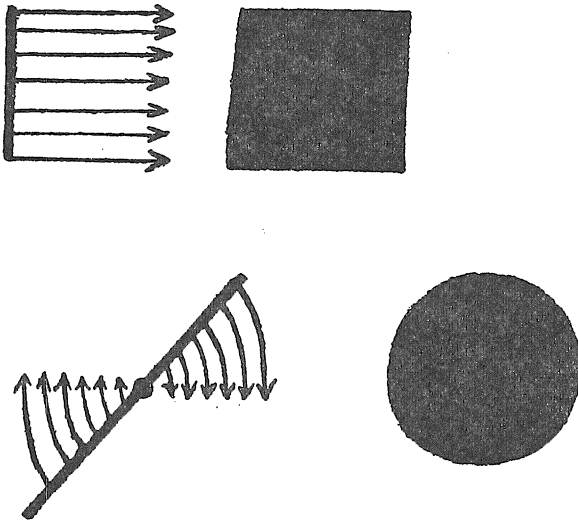


Fig. 8

**Passive Viereckslinien und passive Kreislinie, zugleich aktive Flächenbildung.**

い出される。美術、造形の世界においては、点を視覚的に知覚出来るように、位置だけでなく、大きさを与えている。美術における点は、点に大きさが与えられていることによって、さまざまな表情を持つ。表現上の問題としては、まづフォルムがありテクスチャがある。点の形であり、点を表現する素材、材質である。そして、色、光、動きなどによって点の表現がさまざまに展開出来る。このように表情豊かな点のあつまりである線はもっと表現の可能性を多く持っている。線には幾何学的な線と自由な描線とがあるが、線はあらゆる形の代表とってよい。“Pädagogisches Skizzenbuch”におけるクレーの描線もそれ自体が実に豊かな内容をもっていて見ていて楽しい。線の芸術といわれるゆえんであろう。直線系と曲線系は線の二大系統とってよい。直線は硬直であり、頑固な感じであるのに対して曲線は優雅で柔軟である。曲線の速度の変化は運動感を感じさせるし、変化に富んだ曲線はリズムカルで若々しい。点に大きさがあるように、線には太さがある。太い線は、力強く、鈍重でにぶい、細い直線は鋭く鋭敏で神経質である。点、線、面のもっている豊かな表現の可能性についてクレーはそれぞれが独立した価値を持ちうるように、点、線、面、色と形が、音楽における耳のことばのように、美術における目のことばとして、造形言語、造形方法として、話し、語りあえるようにきびしく考察し、バウハウスでの講義においては自らの体験をもとに学生たちに語りかけたのである。

### 5 節 総括 (9～12図)

「第1の場合、アクティブな線と、ネガティブな面：線としての動きをもととし、線としての効果に終始する。この際に生ずる面はそえものである。第2の場合、仲介の線：線としての動きをもととするが、結果として面を生む。第3の場合、アクティブな面とパッシブな線：面としての動きをもととし、面としての効果に終始する。この際に生ずる輪廓の線の効果は、そえものである。」

線と面との関係について、Fig. 9a, b, c の場合は線が主体であって、線によってできている面は、面としてのあり方よりも、むしろ線の動き、方向、流れを主張している。Fig. 10 は Fig. 7 と Fig. 11 は Fig. 8 と同じである。一本の線についてわたしたちの目と心はさまざまな感じ方をする。—————はただ単に点の軌跡として方向性のみを感じさせるのではなく、この一本の線はちょうど紙の上に一本の黒糸がおかれているように、のっかっているのかもしれない。また、フォートリエの絵のようにきりさかれたキャンパスの奥深くからのぞいている一本のみぞなのかもしれない。またこの一本の線によって、分割された画面をわたしたちの目は面として見ているのかもしれない。一本の線はその面とのかかわりにおいて、そのあり方はさまざまである。

Fig. 12, 「三つの場合、アクティブ、仲介的、パッシブの各概念の話法による説明。アクティブ：私は倒す（人が木を斧で倒した）。仲介的：私は倒れる（木が人の打撃によって倒れた）。パッシブ：私は倒される（木が倒れて横になる）。」クレーはいままで使ってきた用語、アクテ

## 5 Zusammengefaßt (Fig. 9—12):

### ERSTER FALL:

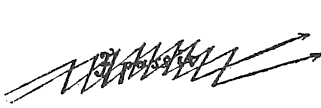


Fig. 9



Fig. 9a



Fig. 9b

Aktive Linien, passive Flächen; lineare Energie (Ursache); linearer Effekt (Wirkung), Flächen-Nebenwirkung.

### ZWEITER FALL:



Fig. 10

Mediale Linien; lineare Energie (Ursache), Flächeneffekt (Wirkung).

### DRITTER FALL:



Fig. 11

Aktive Fläche, passive Linie; Flächenenergie (Ursache), Flächenwirkung und lineare Nebenwirkung.

ィヴ, メディアル, パツシヴについて説明している。線と面との関係を抽象的観念の世界だけの理解にとどめないために。

Fig. 12 はいままですべてのまとめ、点と線と面についての要約である。

Fig. 12 の右は面の領域、左は点の動きによる線の領域、まん中がメディアルな領域である。線の領域においては、線はアクティヴであり、面はパツシヴである。クレーには沢山の素描作品が残されているが、これらは全て、生き生きとした線が生命であって、線の美しさ、たしかなさが彼の作品を左右している。面の領域においては、面がアクティヴであって線はパツシヴである。色面によってあらわれる線がそうである。

クレーの創作活動の発展には、旅行がしばしば大きな役割をはたしている。中でも1901年の

## DIE DREI FÄLLE:

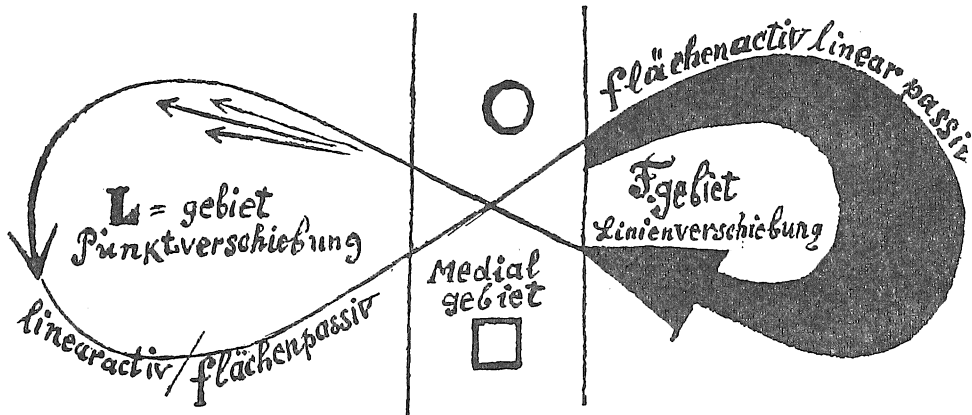


Fig. 12

## Sprachliche Erläuterung

zu den Begriffen aktiv, medial und passiv:

aktiv: ich fälle (der Mann fällte mit der Axt den Baum),

medial: ich falle (der Baum fiel unter dem Hieb des Mannes),

passiv: ich werde gefällt (der Baum liegt gefällt).

イタリア旅行は彼に深い感銘をもたらした。ルネッサンス盛期の絵画、彫刻よりも、建築、大伽藍建築に感動したのである。1903年12月、クレーの日記<sup>17)</sup>によると、

「イタリアで建築芸術の理解を深めてくると、ものを見る目が肥えてくるのが、自分でもすぐわかるのであった。どの建物も実用のために建てられたのに、そこにあらわれている芸術は、ほかの芸術分野の作品にくらべて、はるかに調和のとれた純粋さを保っている。この空間の有機的構造というのは、どんな先生にならうのよりも大きな収穫であった。<sup>18)</sup>」

「私はいたるところにただ建築、線のリズム、面のリズムだけを見る。<sup>19)</sup>」

建築は純粋に数学的な法則と秩序によって支えられていることで音楽的である。音楽好きのクレーが、建築のうちに芸術の本質を見出したのは当然のことかもしれない。

“Pädagogisches Skizzenbuch” の内容を、モホリ・ナギーは次のごとく要約している。<sup>20)</sup>

I : 点の動きとしての線

面を明確にするものとしての線

数学比例としての線

動きの軌道に対する座標軸としての線

II：視覚の案内としての線

視覚的根拠としての線

心理的バランスとしての線

III：エネルギーの投影としての線

IV：遠心的・求心的な動きの象徴としての線

意志と無限の象徴としての線

色彩の変化と運動の諧調の象徴としての線

“Pädagogisches Skizzenbuch”はクレーの線についての研究といってよい。クレーの芸術が線の芸術といわれるのは、クレーの創作活動に線が重要な意味をもち、位置をしめているからであるが、そのかげには、クレー自身のたゆみない線についての研究があったのである。

“Pädagogisches Skizzenbuch”にはクレー自身の音楽性があらわれている。クレー自身、音楽的であるとは前にのべたが、クレーの日記にもいたるところ演奏会および演奏活動についてかかっている。日記には美術家としての思索よりも、まるで音楽家の日記のように音楽に関することが多い。クレーはバイオリニストでもあるが、バイオリンの弦と弓はクレーの線であろう。張りつめた弦は直線、弓は曲線、左と右手の指先は *mediale linie* である。

“Pädagogisches Skizzenbuch”にはクレー創作活動の秘密がうかがえる。そしてつねづねいっていたように、クレーにとって教えることは同時に学ぶことであった。ただ芸術家然として教育の場にいたのではなく、教育活動に情熱をかたむけ、自分が学び、発見したことのすべてを語りつたえようとする意気込みが、“Pädagogisches Skizzenbuch”の中には満ちあふれており、クレーにとって、教育活動と芸術、創作活動が一つのものであったことを示している。

## お わ り に

本稿においては、“Pädagogisches Skizzenbuch”の考察を中心にしたため、クレーについては、クレーの音楽性がとくに本研究に重要であることから、その音楽性への考察のみにとどめた。バウハウスについても、バウハウス研究が近年盛んであり、バウハウスが近代芸術およびデザイン、建築にあたえている影響の大きさを考えると、ここにも大きな研究テーマがあることに気がつくが、これもクレーとバウハウスの関係のみにしぼって考察するとどめた。本稿は“Pädagogisches Skizzenbuch”研究の一部であるが、数年来あたたためて来たテーマをやっとここに実現出来た喜びが大きい。後日の本研究継続のために、さらに資料を得、諸兄の御指導を得て、研究を深めてゆきたい。

## 註

- 1) Ladislaus Moholy-Nagy. (1895~1946), ハンガリー生れ, アメリカの画家。
- 2) 「ポール・クレー」: 造形芸術論, 作品と生涯, 勝見勝訳編 1957年 三笠書房。
- 3) “Pedagogical Sketchbook” Introduction and Translation by sibly1 Moholy-Nagy. London Faber and Faber, 1954.
- 4) “Pädagogisches Skizzenbuch” Neue Bauhaus-büchher, Berlin, Florian Kupferberg Mainz. 本稿の原文(凸版)
- 5) 1969年, パウル・クレー展, p.11. 西日本新聞社。
- 6) 「クレー」 p.13 坂崎乙郎著, 美術出版社。
- 7) Walter Gropius; 1883~1969, ベルリン生, バウハウス初代校長 (1919~1928)。
- 8) 前出, 「クレー」 p.147
- 9) 同上「クレー」, p.147
- 10) デザイン学研究No.13 p.39. 日本デザイン学会論文集。
- 11) 西日本新聞社主催により, 久留米, 長崎, 鎌倉, 大阪, 他で開催, 初期より晩年にわたる約200点を展示。筆者は盛会の大阪展を鑑賞。
- 12) 前出, 「ポール・クレー」, p.134, 以下訳文はこの書, 勝見勝氏のものによる。
- 14) 前出, 「ポール・クレー」, p.119.
- 15) “Schoepferlsche Konfession” Berlin, E. Reiss, 1920, p. 28.
- 16) 前出, 「ポール・クレー」, p.67.
- 17) “Tagebaecher 1902-1905”
- 18) 「クレーの日記」 p.165. 南原実訳, 新潮社。
- 19) 「芸術家との対話」 p.209 矢内原伊作, 雄渾社。
- 20) 前出, “Pedagogical Sketchbook” p. 62.

## 参 考 文 献

- Paul Klee : Will Grohman, New York. Harry N. Abrams Inc, (井村陽一訳・美術出版社) 1967.  
 PAUL KLEE : Werner Haftmann, Prestel Verlag, Munich 1950.  
 「クレー」現代世界美術全集 13. 集英社, 1971.  
 「Klee」ファブリ世界名画集 53. 平凡社版. 1969.  
 「クレー」現代美術 7. みすず書房, 1959.  
 BAUHAUS : Hans Mingler. Cambridge/Mass, The MIT press. 1969.  
 「バウハウス50年」東京国立近代美術館, 1971.